

<p>7月30日 (日)</p> <p>Ⅱ 歴代 4章</p>	<p>「職人の頭フラムはソロモン王のため、すなわち主の神殿のために、求めに応じてこのすべての祭具を作った」(16節)。ティルス王は建築に必要な材料と同時に優秀な職人フラムを派遣してダビデの神殿建築に協力した。どんなに素晴らしい材料が揃っても職人の技がなければ祭具にならない。私たちも主の御手において初めて「主の器」とされることを覚えたい。</p>
<p>31日 (月)</p> <p>Ⅱ 歴代 5章</p>	<p>「『主は恵み深く、その慈しみはとこしえに』と主を賛美すると、雲が神殿、主の神殿に満ちた」(13節)。「主は恵み深く、苦しみの日には砦となり、主に身を寄せる者を御心に留められる」(ナホム1:7)。礼拝は「主の恵みと慈しみ」を賛美し、主の恵みと慈しみ」に信頼して世界に出かけていくこと。今日も聖霊が私たちを礼拝に招き、私たちをこの世界に派遣する。</p>
<p>8月1日 (火)</p> <p>Ⅱ 歴代 6章</p>	<p>「どうか、あなたのお住まいである天から耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください」(21節)。神はいったいどこにおられるのだろう？これだけ苦しんでいるわたしの叫びを神は聞いてくださっているのだろうか？主イエスは「聞き届けてくださる方」として私たちの間を生きてくださった。十字架、それは神が私たちの声を「聞き届けて」くださっている確かなしるし。</p>
<p>2日 (水)</p> <p>Ⅱ 歴代 7章</p>	<p>「ソロモンが祈り終わると、天から火が降って焼き尽くす献げ物といけにえをひとなめにし、主の栄光が神殿に満ちた」(1節)。主はソロモンの祈りを受け入れ、この神殿でささげられる祈りに「絶えず目を向け、心を寄せること」(16節)を約束された。私たちにとって「主と共に歩むこと」以上の幸いはない。今日、その「一番の幸い」を選び取ることができるように。</p>

<p>3日 (木)</p> <p>Ⅱ 歴代 8章</p>	<p>「王が祭司とレビ人について命じたことは、宝物庫のことも含め、何事もおろそかにされなかった」(15節)。神殿における日ごとの礼拝は、祭司とレビ人たちの忠実な働きによってささげられた。それは同時に、人々が神殿に携えてくる「献げもの」を誠実に取り扱う大きな責任が求められた。今日、主がわたしに託しておられる働きに誠実に応えることができるように。</p>
<p>4日 (金)</p> <p>Ⅱ 歴代 9章</p>	<p>「ソロモンはそのすべてに解答を与えた。ソロモンに分からない事、答えられない事は何一つなかった」(2節)。人々はソロモンの英知に感嘆し、イスラエルの国富は大いに増し加えられたが、その足元で一番大切なものが崩れ始めていた。「すべてを与え、すべてを奪う」、主の前に畏れと感謝をもってひれ伏すことを忘れるとき、知恵と富は大きな罠となる。</p>
<p>5日 (土)</p> <p>Ⅱ 歴代 10章</p>	<p>「王は民の願いを聞き入れなかった。こうなったのは神の計らいによる」(15節)。ソロモンの英知と富による繁栄のもて息子たちは道を踏み外していく。「民の声を聴くための知恵を主に求める信仰」を彼らは受け継ごうとしなかった。主はソロモンの息子たちが、自らの愚かさに気づいて立ち帰る「時」を大きな忍耐をもって待ち、祈り続けられたのであった。</p>
<p>6日 (日)</p> <p>Ⅱ 歴代 11章</p>	<p>「主はこう言われる。上って行くな。あなたたちの兄弟に戦いを挑むな。それぞれ自分の家に帰れ。こうなるように計らったのはわたしだ」(4節)。主がイスラエルを南北に分けられたのは、両国で主を証する役割を分担するよにというみこころだったのかもしれない。富や栄光さえも、多すぎれば重荷。世界の国々が役割を分担しながらつながって行けるように。</p>